

新堤防は善久から延伸

合流点の改修が始まる。

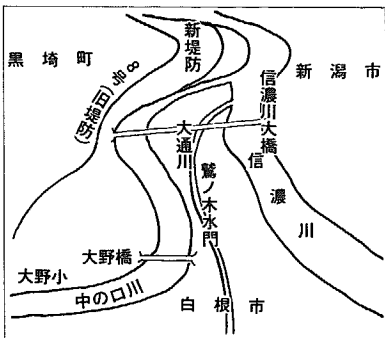


合流地域

150年に一度の大洪水

信濃川下流の改修は既に始まっている。山田の試験場や新潟日報社の裏に行ってみればわかる。巨大な堤防がそこにある。この堤防は建設省信濃川下流工事事務所が造っている。新潟市文京町にある同所で治水事業を聞いてみた。

同所は昭和四十年、閘屋分水の着工に伴い開設され、大津分水から新潟市の河口まで信濃川の下流約六十キロを管理している。主な事業は①昭和四十七年に通水した閘屋分水の建設 ②中の口川水門、蒲原大堰の建設(中の口川分



信濃川・中の口川合流地域

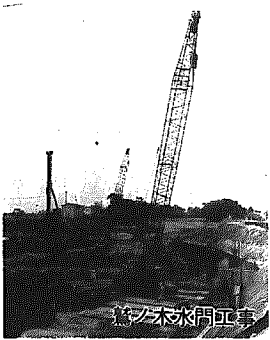
派点)③堤防低部対策 ④本川下流改修、などである。

前述の巨大な堤防は河川改修事業として昭和四十六年に着工し、西川排水機場から善久第二排水まで約四キロ出来ている。工事は継続中で本年度はさらに二百メートルほど大野の方へ伸ばす。

この新しい堤防は信濃川左岸黒埼町側)だけでなく右岸(新潟市側)も建設中である。高さは約三メートルで、同所では「過去のデータからみて百五十年に一回起こると予想される大洪水に耐えられる堤防」と言う。その大洪水とは、帝石橋地点で、水量は毎秒四〇〇〇トン、水位は三メートル九五センチと考えられているものだ。ちなみに戦後最大の洪水といわれる昭和五十三年の六・二六水害のときの水量は約二三〇〇トン、水位は約二メートルと観測されているからこれよりはるかに大きい。

鷺ノ木水門は工事中

信濃川下流工事事務所ではもう一つ黒埼町で改修事業を進める。合流点処理事業で、信濃川と合流する中の口川の兩岸(黒埼町大野



鷺ノ木水門工事

家屋を移転する人も

どうなるのか——黒埼町側も心配しなくてはならない。六十一年から大野小裏の五区で用地買収が始まっていた。四戸が移転しなければならず、既に二戸は引越している。今年十一月に移転する予定の高橋正子さん(二八歳)は不安を隠さない。「近々、堤防を造るというのですから仕方ありません。子供(小四)が中学へ入学するまではいたかったです。五十二年の水害のときあと二十センチで床上浸水でした。それで今の家に建て直したんです。まだ八年。借金も残っています。とても補償金ではたりません。正直のところ、たいへんです」。

五区のほかに柴町、七区、八区、新田町がかかる。中の口川の河川敷には交通公園やゲートボールコートがある。コートでゲートボールをしている大坂正男さん(七四歳、七区)は、「このコートもなくなるし、うちで占用許可を得て耕している畑もなくなる。でも堤防を造るためだから納得はしてる。ただ、家屋にかかる人もいるから、

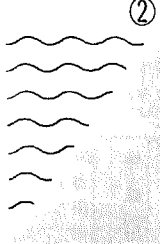
工事は63年度からか

信濃川下流工事事務所ではこう説明する。大野裏には堤防といえるものはない。しいて言えば市がたつ町道か。いまのままでは川ぎわに建つ家屋を洪水から守ることはできないだろう。大津分水から下流には、刈谷田川をはじめ、五十嵐、下条、加茂、能代、小阿賀野といった、災害の記憶が新しい中小支川がたくさんある。それは改修が進んでいるため、信濃川に流れ込む水量は短時間に、しかも多くなる。こうした状況から、六・二六水害級の降雨量が中下越

と白根市鷺ノ木)に新しい堤防を築き、あわせて両川に挟まれた大通川の鷺ノ木水門を改築するものである。計画区間は国道の大野大橋から合流点まで約二キロ。前述した善久の新堤防とも将来つながる。

ルポ・河川改修

信濃川下流工事事務所を訪ねる



白根市側では五十九年度から用地買収に入り、本年度から護岸工事に着手する予定。また、鷺ノ木水門の改築工事は六十一年度から六十三年度までの三カ年計画で進められ、現在工事中である。大野の裏に行くとき桜並木の一部分がなくなっているのが見える。

鷺ノ木は黒埼町と合併話があったほどつきあいは古いし、学校も商売も大野であった。鷺ノ木桜町の真柄友一さん(七〇歳)は言う。「七十戸のうち二十数戸が移転しなければならぬ。寂しいねえ。中の口川の堤防は危ねえし、鷺ノ木水門も出来てから三十年もたち役に立たなくなっているけど」。黒埼町八区の栗林タマさん(七四歳)は「昔は鷺ノ木観光協会ができたほど花見でにぎわったもんだ。鷺ノ木はどうなるんかいねえ」と対岸を見ながら心配する。

にあれば、新たに信濃川の水が中の口川に逆流する危険性も加わる。五十三年よりも合流点の負担は重くなってきた。

同所は事業の見直しを「予算次第なので具体的にどこをいつ工事するかは言えない。しかし、できるだけ早くしたい。六十三年度から大野大橋から下流部の築堤工事に入りたい。巨額の経費と長い年月がかかる。用地買収や家屋補償など、地元のかたの理解と協力をぜひお願いしたい」。

合流点処理と鷺ノ木水門改築の総事業費は百億円ほどという。善久まで伸びた新堤防の端に立ち大野方向を見ると、信濃川大橋があり、大野の町並が見える。その先に大野大橋がある。距離にして約二キロ。この二キロに将来新しい堤防が築かれるわけである。そのときまで「百五十年に一回の大洪水」が起きないことを祈るか。

6.26水害

昭和53年6月26日。戦後最大の洪水といわれる。黒埼町でもかつてない被害を受けた。350ヘクタールの田畑が冠水し農業の被害は3億円。床上浸水3戸、床下浸水239戸。中の口川の堤防(大野)では土のうを積み浸水を防いだ。河川敷は右写真のとおり水没した。



六・二六水害(最高水位より四〇センチ減水)



栗林タマさん 大野八区 七四歳



高橋正子さん 大野五区 三八歳



大坂正男さん 大野七区 七四歳



善久まで伸びた新堤防